

特集：日本学術振興会賞と研究者養成

研究者養成の課題：人材育成は国の根幹

はじめに

多くの研究者が研究を目指す動機は、いつ頃に生まれるのだろうか。子供は生まれつき好奇心の「かたまり」であり、子供は「白紙」で生まれ、周りの大人と関わりながら育つ。新しいものに「なぜ？」と興味を示すのは当然である。過去を振り返ってみると、新しい知を創造し、新しい概念を提供してきた人たちは、ほとんどがその時代の中では「異端」と思われている人が多いことが知れる。人間の能力はどの指標をとっても正規分布（Bell shape）をするようで、たとえば大学入学試験の「偏差値」がいくら高くても、所詮は、時代の流れのなかで、一つの指標として「きわめて優れている」のに過ぎないのである¹⁾。

研究者の感性、'Out of Bell Shape'

20世紀の科学の進歩は、私たちの生活のありようをこの100年ですっかり変えてしまった。たとえば、今年にはEinsteinの6つの論文投稿、発表（5編が1905年に発表）の奇跡の年 'annis mirabilis' から100年である。たとえば1901年に始まったノーベル賞受賞者の自伝（website〈www.nobelprize.org/index.html〉で見られる）を見てみるといろいろな背景があるものの、どこかに本人が研究への情熱を自覚し、夢中になり始めるきっかけがあるように思われる。それは多くの場合、自然への素直な興味と感動であり、かなり若いときにこの感性が芽生えている。このような感性、感動する心がどうして芽生えるのか、どのようにして夢中になって、何を考え、追いかけるのか。今回の受賞者の話も興味のあるところである。

しかし、そのような感性が伸びるのはそのあとの教育環境による。優れた人との出会い、多くの他分野の人たちとの交流等が創造性の高いところの形成には重要であるように思われる。何でもノーベル賞を話題にするのは少し品性を疑われても仕方がないが、わかりやすいので例として取り上げているだけであることをお断りする。是非、websiteをたずねてみることをお勧めする。どんな背景、出会い、感動がきっかけであるのかを「熱く」語っている受賞者に感動する。いかに、すばらしい教育者との出会い、そして研究者になってからは多くの他分野の人たちとの交流が新しい方向へのきっかけになったかが見てとれる。日本の自然科学受賞者の4人が物理という背景には、丁度100年前に東大総長であり、白虎隊の生き残り、イエール大学で物理を修め、その一生を教育にささげた山川健次郎^(*脚注1)の貢献が極めて大きい²⁾。

田中館愛橘、長岡半太郎たちを育てた教育者であり、日本の物理学の創始者といえる。学生を第一に、そして当時にあつて大学の自治を守った事でも知られている。「芽」を育てる教育の重要性がよくあらわされていると思うし、研究者の教育、育成の大事さが良く理解される。

日本の課題：若者を育てる

現在の日本の多くのリーダーは、若いときに米国留学で研究を開花させた人が多い。しかし、多くは2～3年で帰国し、同じ大学へと戻っている。一時、訪問しているようなものであり、お客様であり、決して自立するチャレンジではないのである。米国では大学ではなく、個人へ研究投資することこそ重要という政策であり、いまや世界の研究者の登竜門であり、競争の場であり、意欲ある研究者は米国を目指す(これが欧州の悩みでもある)。大学院の充実、またポストク制度等で若い研究者に独立を促す。事実、30歳代中に「独立」、つまり大学院、ポストク等の時代に指導を受けた教授等から別の機関等で自立していなければ、「一人前」としては認知されない。そういう研究者社会である。英国でも自立を重視する。そうでなければ、単なる教授の手足としてしか認められない。学部、大学院、ポストクと、指導教員が変わることが、研究者としてのキャリアでの常識であり、同じ研究室で同じ教授の指導の元で研究を続ける日本とは好対照といえる。特にポストク時代はよその指導を受けるのであり、自分で考え、新しいテーマを模索し、チャレンジする機会を与える意味で、自立した研究者になれるかどうか、テストされる最も大事な時である。苦しい。しかしこれを乗り越えて初めて独立した、新しい開拓者になる権利が生じるのである。ポストクのあとは、助教授等としてまた別の機関へ移るのが常識であり、このような「他流試合」の連続を通して、広く交流しながら、自立した研究者として認知され、育てゆく。

これに比べると日本は社会構造も関係しているものの、基本的に「他流試合」のない内向き社会であり、若者は自分を厳しくテストしつつ自立していくような構造になっていない。社会も組織人間、会社人間を育てていたのであるから、いたしかたないが。研究者も、偏差値の高い大学であれば卒業した大学にとどまり、大学院へ進み、「個」人ではなく、「タテ社会」の研究者社会の一員として育てていく。だから研究の成果は全体としては量的には大きいのが、個性ある新しい研究が育ちにくい。教授には都合の良いシステムであるが、新しい「芽」や発想や人材は育ちにくい。これからのグローバル時代ではこのようなシステムは、都合の良いところもあるが、創造的「研究」という視点からはマイナスであろう。

おわりに

若いときこそチャレンジ精神があるのであり、研究者としては、20代は勉強、30代は自立した研究者へのチャレンジ、40歳をすぎれば若い研究者の育成に配慮する事が肝要であろう。研究者として40歳ではかなり方向は出来ているはずであり、新しいことよりは、「守り」に入り、自分の業績をさらに伸ばすのであり、新しい開拓者にはならない。例外はいつでもあるが、自分は例外であると考えてるのは不遜というものであろう。大体そんなことを考える研究者は「本物」とはいえない。ほかの事に頭がむいているのであろう。若い人にこそ機会を与えなくてはならない。これが日本の課題である事は、国際社会での本物を知る人にはわかっているのである。

今回の受賞者の将来に大いに期待し、自分達のプラスも、マイナスの経験も次の世代の育成に是非生かして欲しい。

*脚注1

山川はその後、現在の九州工業大学の初代学長（当時は明治専門学校）、九州帝国大学初代総長、再び東京大学総長（その間、2年間京都帝国大学総長併任）、歴代の東大総長で最も長い任期を勤めた。

■参考文献■

- 1) Human Accomplishment . Charles Murrey . HarperCollins 2003年.
- 2) 山川健次郎伝. 星亮一, 2004年平凡社.

黒川 清（くろかわ・きよし）

日本学術会議会長

